

15:1 イスラエルの王ヤロブアムの第二十七年に、ユダの王アマツヤの子アザルヤが王となった。

15:2 彼は十六歳で王となり、エルサレムで五十二年間、王であった。彼の母の名はエコルヤといい、エルサレム出身であった。

15:3 彼は、すべて父アマツヤが行ったとおりに、【主】の目にかなうことを行った。

15:4 ただし、高き所は取り除かれなかった。民はなおも、その高き所でいけにえを献げたり、犠牲を供えたりしていた。

15:5 【主】が王を打たれたので、彼は死ぬ日までツアラアトに冒された者となり、隔離された家に住んだ。王の子ヨタムが宮殿を管理し、民衆をさばいた。

15:6 アザルヤについてのその他の事柄、彼が行ったすべてのこと、それは『ユダの王の歴代誌』に確かに記されている。

15:7 アザルヤは彼の先祖とともに眠りについた。人々は彼をダビデの町に先祖とともに葬った。彼の子ヨタムが代わって王となった。

15:8 ユダの王アザルヤの第三十八年に、ヤロブアムの子ゼカリヤがサマリアでイスラエルの王となり、六か月の間、王であった。

15:9 彼は先祖たちがしたように、【主】の目に悪であることを行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪から離れなかった。

15:10 ヤベシュの子シャルムは、彼に対して謀反を企て、民の前で彼を打ち殺し、彼に代わって王となった。

15:11 ゼカリヤについてのその他の事柄は、『イスラエルの王の歴代誌』にまさしく記さ

れている。

15:12 【主】がかつてエフーに告げられたことばは、「あなたの子孫は四代までイスラエルの王座に着く」ということであつたが、はたして、そのとおりになつた。

歴代誌を見ると、アザルヤは傲慢のために主に打たれたのだとわかります。主の目に良いことを行っている、高いところは取り除けなかったというように本当の従順がないと、人は傲慢になって主に打たれるということがあるのです。自分は従って良いことをしているのに何故…という不満よりも、自分は何か従っていない部分はないだろうか…という謙遜な姿勢が大切です。

イスラエルの王たちは、誰もが自己実現のために争って王位についたということが分ります。その不信仰の連続には、このような不信仰の原点があつたのです。私たちも事を始める時の動機が大切です。時には自分の行いや今あることの原点をさかのぼって、省みる必要があります。もしも主の目に反することがあつたなら、悔い改めて赦しときよめが必要です。



①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

